



古東庵句集

下

中村俊定文庫

文庫 18

424





古来庵句集

秋之部

今秋と驚く門掃く男の
水月此うき目を見てと秋の
塙乃巢と雨をほくむやほの路

今秋と驚く門掃く男の
水月此うき目を見てと秋の
塙乃巢と雨をほくむやほの路

いつとれうき目を見てと秋の



初秋や慟うたご紙一ニふく
庵も々翔、けぢ折紙むむ
年月をいそぐて長一ある如く
ぬつかしを逢秋の星る礎一の
ふらし物と福も守むを星の高
勢若と投書や文義は
人界一も業わらば一
穢嫌の曉起や多えころ火

手涼一雨早ちく浩むん平
も一あゝも桐の葉落や詠の
襟織りたると断てほり
下書もとらわの奥や梶若うい
とや、く物と文るやその涼川
あ、月とお子外をとならわ
ふ多月成るはあ一そあまのは

二年のまゝ

枕乃紫也糸如田井子夏物らん
船、ふやほめくくはる人か息
おさ、ほき雨乃あつる白をきせつ、れ
蘇州やの侍起をき茶を李
朝ふかや峰ころもなぬ矣此多
あやうのかや刀自のむしをきよも
お峰ふて志りーとあつておさるー
ねくの風若くはや露のうら

鹿の目若く二り此身や小萩系、
おまひ入る藤の蹄ーや小七きり
茶の香や淡水く寝所は塩漬子
ーあや蜂も茶乃念好
待てつくる葉やおらん蘭の主
ひーいふそ端をふ種のみおらん
むし浪尸埋てておれおつた

留物る句

於一舟子も時節も秋

超波牌

老し吐あふふ年もさうくもて

なすきとといえとて新なりは秋
えたの心もあふるもや葉も堂
早業の纏はるるならも秋
高に啼やあしはも水のあり秋
群れ海一浪もあふる江鯉の魚

一日庵のほろあし持のてと谷舟は
りくんと垣かの男にならるる秋
通るこを即是空眼あをり

物喰ふも秋は牛を秋の牌

この句を考案するは此也

西山も斬り於るあは産摩河

圖大小波別

晴の目やあは人遊るも時

きくはあはる

火もも裏とせ今あつた
橋船人等たうれあきり
副たほ星の銀治も秋の暮

画讚

他乃田一先目哉やわつ路の暮
秦吉了常多とほくもわ秋はれ

わし御方海川海崎の夜をる

雪といふ雨も絞るや秋暮海

すさわ一や三里をえと滝きふ

山伏の貝吹川や霧はる

霧はれを蒸たるとわ此味、な

あす此世一玉露もくは霧な

深きをち此いふちくうつ

なま、霧のふるわね半小津城

買柵や足る踏まると先祖

仙橋と妻の道

世をう——此はつらうきれお子

自休の追悼

治次のみき丸 権守かろ世也

庭臺錦糸

野買に留りしきくし魚の橋

う灯籠月も夏等の梢うわ

文月のふ知相もう——大文字

ふきのさといえはをま

橋の葉ふふ此世の縁鬼乃埃る

接納

蘇すき回——系鏡や接取ふ

甲斐うく

つし入やあ言と作る面の内

生雀飛を藤もういて踊るか

身と背のたうとあふたうあ

月相より——おとあ此橋の柳所

子を抱て新日くまや辻角力

町を次々

町をくまに引れ溜場若くすな

新波十七回

看經くまを澤なれきりか

くまをほろくまにけりもきり

福妻此門くまを梳く女このま

いなつふや世をきりそのくま

船妻やあふなき秋の毎ところ

あまのせり踏らくまの売

秋風のくま散らふとする本城なる

くまをすまてくまをくまの雁

以磨

寄子くまに月毛釣るも秋の宿

くまに子我親すまあふ月の友

此のくまをきりもきりくま
豊年のかきをきり

名月や早地西花多小蛤

解面一

月影北流雲影踏むや明石沼
名月やあふみ北雲を柳のうら

その比世といふ。幸ありて

又し遠きいふ馬鹿こそかう月夜
う一部屋も月影むうや孫をき

下和りあふりあされと

三序うゝ見をふもや月北露
猿澤一月夜研山山
小和申より戸捨舟多ふの月

一鶴一贈る

ふかりり月もいそぎ世哉花魂
名月や緑丘の下流 捨 陶

神楽川のせりまを

月とたう言や移るは此城別取

河原院

ふらん月もやたはれ此の光
山崎の月小高ひあかりの月
新月や月夜、欲らういと静か
は〜輝の舎るまな〜らるる月
月さふや輝の宿に裸むし
名もやを念ふもく〜の伝
花見よをるま〜た〜し〜るる

新着てあ〜いのみは夜更〜つな
新月や〜も〜に〜人〜る
産当めけい〜つて〜は〜

新文神

〜
名もや〜るる〜る東やる

六家仙の画

こつと〜の〜も〜むつ〜月〜友

橋より坂師をさすやす月見のさ
月見をさす人若糖より噛ふてぬふ

名ももたらさるる古例は濃淡のさす人わ
れは福なくはたかしくのさす人わ
らすまうさるるてはさすれをさす人
ふれさす人わ

増す花やふこの相着てさす月
さす人わ網子。群してさす月

この二季は江の島より此吟し

群ふし掃きく庭乃月見のさ

いつち田より月如経やこのさ
名月やさるるななな商家さる
はして寝てさす海の月如宿
杖ついで月見のさあやえなれ家
うを福乃このさ中法やふの月
さ(坂)切平してや約もさ
仕合を約やさやこ如ささ月
政生合さささやさるる鯉の面

龍門を信北歩城や板生會

江の島龍門を記す

岩穴へ入る蛇や波若あつた
ひしな討死しあつた
雨雲は晴一本港か
ふあふあつた
川秋はうらめあつた
寒か人若たふや

あつた御方此賀と

稲倉や仙臺百越寺この秋

大羽、橋の上を以

いな房や夕此高尔幸告せ

高牙万句

春小雨夜夕いなり
しれふと合せん
秋の思ふあつた

山車秋や世を推人乃伸る入
わとられと
いふと
あつた

谷川やうらひは若れ目も細き
藤の影や耳たう山は懸る
公川や石のうけく若の群
鷹ヶ峰山花う

松葉のうらみはきくや藤の影
玉台う

糸のうら木樨は香やう若れ
本樺をとして清流にほん

京都うらう

柳もあゝとす 帰ふとる

海の像と

凡せう 芭蕉ハ雷う可大

清きよ花て 穂吟う

かゝらぬ 風の音ねはあ

種戀

あきの木を我よ短くをみる


~~~~~菊を露も際つくる~~~~~  
~~~~~は~~~~~破れ~~~~~立見菊の籠  
~~~~~茶屋の医師と~~~~~あ~~~~~菊の法  
~~~~~十~~~~~指~~~~~は~~~~~つ~~~~~あ~~~~~く~~~~~は~~~~~茶~~~~~の~~~~~之  
~~~~~き~~~~~久~~~~~酒~~~~~や~~~~~子~~~~~等~~~~~も~~~~~常~~~~~も~~~~~常~~~~~便~~~~~也

五梅新巻

~~~~~筆の跡~~~~~ハ~~~~~筆~~~~~如~~~~~飛~~~~~ハ~~~~~八~~~~~筆~~~~~乃~~~~~矣  
~~~~~た~~~~~ら~~~~~ち~~~~~て~~~~~志~~~~~る~~~~~菊~~~~~の~~~~~苦~~~~~も~~~~~也~~~~~酒~~~~~の~~~~~紹

~~~~~ひ~~~~~く~~~~~せ~~~~~の~~~~~酒~~~~~乃~~~~~價~~~~~は~~~~~也~~~~~菊~~~~~つ~~~~~と~~~~~也  
~~~~~七~~~~~笑~~~~~も~~~~~さ~~~~~ふ~~~~~あ~~~~~あ~~~~~え~~~~~は~~~~~は~~~~~也~~~~~九~~~~~の~~~~~き~~~~~之  
~~~~~秋~~~~~成~~~~~経~~~~~る~~~~~尾~~~~~末~~~~~や~~~~~庭~~~~~に~~~~~菊~~~~~を~~~~~と~~~~~こ  
~~~~~庭~~~~~を~~~~~あ~~~~~は~~~~~し~~~~~屠~~~~~種~~~~~を~~~~~あ~~~~~ら~~~~~し~~~~~て~~~~~一~~~~~菊~~~~~造~~~~~り  
~~~~~つ~~~~~ま~~~~~ち~~~~~切~~~~~る~~~~~あ~~~~~ら~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~や~~~~~葉~~~~~如~~~~~卷  
~~~~~菊~~~~~折~~~~~る~~~~~ハ~~~~~腕~~~~~を~~~~~け~~~~~て~~~~~取~~~~~除~~~~~か~~~~~る  
~~~~~あ~~~~~ら~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~や~~~~~免~~~~~の~~~~~甲~~~~~筋~~~~~一~~~~~葉~~~~~の~~~~~花  
~~~~~き~~~~~之~~~~~の~~~~~香~~~~~也~~~~~以~~~~~中~~~~~着~~~~~る~~~~~酒~~~~~杜~~~~~氏



茶園の入門と候す

蝶とあはれ彩一程言やきく儂 高

といふの角力ありきん

隠色のちくくくくや菊あはせ

菊詰ふく葉もくちちや足幣持

きく買ふく玉葉もぬく若くち

何人そくくく足袋めき句うか

秋を廻て菊子ちきえは若こ一の如

増らるる一菊子も安き此名候ふ

吟考、追悼

うくくく名取菊又江戸めと

り和きく路のわうちや麻杖ち

夕白れ事ふて面ちたるいさこひく川

子の戸をちち汲ほき一若柳桜

義き然て若花斗ちや和 鈴

舟漕くと言ふも知るや小和 碇



外矣とけすまじく如松花陰  
重人乃志つとことるや所の月  
横雲のつる雲林や所を月  
たぐは之を紅葉うつらふ十三夜  
河原たぐよ柳の影や後松月  
嶺乃端く雁も向き波の月  
文をさちういてたる月影  
り道をささひるる月相り

有る處母の故にみらのれとありて  
まじりしとけしむをささる

むらさきを母のほほを秋乃雪

京々ある人上さふ

春むは人情も如く後花月  
むらも菊も一花と酒のささる  
子龍のまじりてささる新雪

なはとる

新雪まや身を紫のまに病して



神田祭

月新ろ七ツ一とつ神樂昇  
御衣袴也己の紫く落るの尔  
古寺也袖片先に粟如きるをと  
置し人々の門徳と云はれや梅嬢  
高き入は地もまをなす袖中御衣

あま人の道草

灰もくも身を物染めの袖にえらる  
着ふり成もみちとちつ山路にる  
子の節ろりもつらきおれおれ  
さくくんき戀に持梅もももる  
山姥を舌を筆筒乃にき此水  
井垣や小春くをき、女ももる

いつめやま

きつりつ園子おれはもつる  
吹くす智のお風やほらおれ



草花も亦う葉は下のたけこ入

九月花のころを

言あてらせぬと秋草の葉

婦三月十日の夜に  
したまの園蓋名なる  
おとくおとく首途

さかき 立かたは編の音

さかき  
おきわく成るを理る

吟の聲も耳。此毒ちり秋の聲

美此田うとを  
ちと風流を都  
あふた

弓拍子のふりてあはれ也



見物にふる親くはるる見たり

箱巻物

曉月 泉の 跡を するは 舟の

白濁の 子り 手紙を 添て

朝の 露を 石を 五石 炊く 如し

十七の 塚

半世に いると ほど 程で けり 舟の 舟に  
まじり たる 夢を ほど 舟を 煙  
て 霧に 塚乃 ち 者也

秋の 風 菊 女 や さら け

まじり

あつ きの ころ ひと づゝ 舟の 舟に 吏の  
も あり 敵に たる 舟の 舟に 舟に  
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に  
舟の 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

被塚 乃 ほど 舟に 舟に 舟に 舟に

廿日 下 鉢

中村氏 大 舟を 舟に 舟に 舟に 舟に  
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に  
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に  
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に



はる 鏡の如く。糸は縁寝うれ

お西禅林の良事

まはる 波の電光石火

おら 山門

此川を流るる舟もななく川神も  
ふりも足も守りもななく水かたも  
たわもななく人をともやもななく  
わのひもななくおらもななく  
里人の三人四つちもななく  
たる風もななくおらもななく  
中例もななくおらもななく

おそる 一たふもななく  
東海を北より一もななく  
分ち一もななく  
うらもななく

鞆く我を赤りいやあきなり

門井

此あらい二里はつちの小松のまはる  
善のまはるおらもななく  
縁をまはるおらもななく  
おらもななくおらもななく  
おらもななくおらもななく







てはよりしきい修る也さうく  
 色部みいふおこけをたまえり

な種多をあらしん美能れさむ世々  
 と傳へて流るる妻はふらして一と  
 うちあふまきこゝる相をいふと所の人  
 とした麻巾を編くと著ふらう業  
 ありはとけえらく事をさしあ  
 りふさうつて

おぼやきあうさうかえ寸高れむ

まのあいらお種多ハ新らるらふま職  
 をさむわ人うらゝるゝあ知は  
 ゐまゝいさふわらうお軍人を好むを

おうしとぢまるとしてちて路の事  
 さうらううわうら

きうつゝ様さほさうを山路のな

笠同巻

先いそす子種ゆのむらう世こか丸

右場笠弓矢印物也氏布の風流を  
 志していつの年所をさきん序  
 とれたふれけしお師弟の愛をを能い  
 けりよくてまゝあしはまもてきて  
 四時のおく紙画り流らるるさかあつて  
 えんてを流るとしてゝお流ああ此



とつしきにあらはれ節乃は保ひ  
るもつこ平むいふらうこらねとら見  
しを推人の下ま坊世と替らうあし  
さく多ふふれし人きして富むをさ  
し知ぬハ新水如用なめとく洞もん  
あはとあらなをきなく中送つてらる  
こも五しきをえつらんもつてらる  
いたもして富む此戸所しとらあれん  
し徳の事らうこあらはとくむさ  
神くあふつて徳徳心のつききぬ乳  
をくあふか波生尾雨成の流る  
あらわてあし月廿らうあ結成か  
相存道の言あおんく先社継を傳きて  
後文武にほき結あらんを契しはあれらる

白つらん可矢の中如麻の山あま

中京氏のやうなを難をほしを地極  
あら一井北林のあまもあらしの  
あはれをなるとのうく世実と縁と  
あら夕なし一映のあまを懸めきれ  
一り二り此むつしとらにさあやらりしを  
あして富むきんを四あを中をさるん

あつる 答も百あはれあまらる

一巻く道ら

脱推く名中の紫肉やあまの浦  
粵ハ一婦人あはれは富むらあ



たうりもくろくしむるをそとるれりし  
をけりしもいふ事や志の難き事  
藝にて

世道乃々々々一々々々為の業  
完成を江戸府中までして後世を  
高信くきくわあふし一此地に  
曳一節うら一く徳南あれつき  
一ききくくく

いふえぬ廊のわらわ松のや

あはれを平のゆきのもたのこを  
くもりんをき境へして二十  
おんくきをくはくんこの地

通き六乃山申の舎を尋て壮年如  
いふ一を法に終りのあし一  
申くは山如矣くを給きれ

秋寂一詩事不友衆之つ物

小若鳴く山をあらう一海見えな  
時候のみれくくやうてさ  
坂尾といふ山あり一住創ある人  
風流を藝にて

涼山木一 挽 若くむのに月ん、な

滝不動 此地大なる山



静くみとらるゝに静の如き振る奈

佐白山 北西親世音

露音を振木此もなや依ふ山

石班魚を細くして細く人の心を  
く

秋まわると山川の紫うきくを感

くを紫とこそけの神理すふれも

又借敷地ま世を細く生れを紫に

一句と授く

こ流汁や後海ををる紫山を

医師 衡山を尋て

書ふより端山茂山か味の秋

為前

付乃いしつるこく久うくをえふ

こわこ乃山を月あきして定家

あはハ美湖の求よりて強き山を

まの如く一時の詠むもや今平を

まはに似てくもなきに強き山を

まの山を望むつる山をいふ

裳ふく袖川くよや二の月



わの稚子なれはそこふらふとて  
たふらふ海とまはれはなまをて  
こころはうらみ人只をふりた  
まはれはなまをて  
まはれはなまをて  
まはれはなまをて  
まはれはなまをて

あき風ふりぬるふらふ  
こころはうらみ人只をふりた  
まはれはなまをて

山越しと能き衣人とそとて

同七月二日

中より袖里をうらみ

秋意秋意と流して

百漣と對分

酒翁乃吟眉くわわ川二日月

秋意秋意と流して  
こころはうらみ人只をふりた  
まはれはなまをて

頂此とてかえはなまをて

三日筑波山

餅出と川をうらみ



加ふる季のさへ舟なれを

ほ— 公に跡をたもた川世男此出

途中

—— 家とふてお釣の鳥居山  
貫いて馬糞を苑山と眺来るを

塔塔とくふまを

喉野無人迹

新— 今ふ能はの— 舟友うつ

清うさきの志登あつては造つて  
新— 家を設くとつて先達してを  
うの坂と登るは蘇すき生後  
たもつたぬらうの作えれは波  
足尾雨曳の心く画る、如く  
隙をを子くは百軒をを  
つき清く目もあわなる  
おつけぬれはむらな  
しきもの多く  
おれは  
の  
の



高き子一絶くい長けよとく  
これとさしゆるけり  
経といふ此の  
まをくに育ちつとくやあぬ

宵く此興を、あすや庵を月

秋の月

もいらくどの子種と根乃弾

と流川と道にまといふ所い  
あやしのあは建るい  
のまの財計とぬるた  
飯も心う子あ  
を此のと下蓋の  
ひーほ子うらあ

一きあ也えより  
て早情をえも  
又秋の一

秋のり此之望をた  
秋のり

十之り 雨降 雨降

乃重に、子縮白を  
ぬ秋乃雨



吉来庵句集

冬之部

し、秋意神如傳して立公の  
む、志々秋經書堂をやと書りて  
村崎兩山多男若のたゞく、これ  
お筆は医師とすし、まゝ時節

お筆とす

止りけ降る、時多北坂北五十河



そは雲よて京を時留めたり  
くちか川之夜道出たり  
落葉して幾りし折るぬ後堂  
塔倒建仁王にこれとおもふ  
木乃股しをのう落葉は言は  
たり風の木は葉も和る庵のな  
麻はとく犬し弓射る枯野か  
と切やとくそ水と十二雲

口切や欠摺許中一京  
口きりやたおに一き家知者福者  
口切や壁に母と娘川にぬるに  
西へ川へ物来とあはれ十程水  
十月あつて小児を告ひる人乃許へ

つ葉は秋敬えやとて人の心ありをば  
予も忘れぬとてさかた文し

閑伽楠中雲に小流を記しあり



あゝ禮うれふしの心を針ふ音  
ちゝく指し何をも張舞や紫小紅  
たゞ流うね言精舞や緑うゝ鳥  
糸の糸やまぬく笑ふ下駿河  
婦ゆほや節流口ろくす水  
去るの儘指うゝ

中絶家梅心 継足はふかつて子

起月北別花う季久くくまうこれ

弁財をを歌してホウのりく  
木の葉うさ月れくられい

あふさる女体をもるををまわ月

元武う刺髪乃時

神乃る鳥をを種うゝ刺しを宮  
月空如誓文きこり身とあひす  
次乃る鳥をを坊こり古宮を燈子  
夷海沖うゝ釣する人を浪  
麦前やける咲霧のまはうる



あつとくつ 綴り

菱葉よひを立くは小春の如  
けつしふもろ路をくく 也帰法  
たき成忘也葉よひひ忘あ、仏  
巻葉忘也江戸の上巻を時句  
たせを忘也いて流地燈に七部集

東風家編の功を著す 綴り 笑

情 綴り をあつとくといふ 神 云月

蕙好のくく 不 淋 火桶 有 存  
あくく 名 あり 也 火桶 の 描く 有  
子くく 名 あり 山 描く 有 火 燈 有  
新 有 て 燈 火 新 有 以 中 有 存  
綴り 乃 耳 也 有 有 頭 中 有 存

蕙 綴り の とき

きくく ち 絲 の 有 有 有 有 以 中 有  
くく 綴り 有 有 有 有 有 有 有 有 有 有



鳥の身を火くちや紙子ろ乳  
意知りや家のこがとよ女子並  
驚此血可哀撫人如條ふとこ  
よ如中を紙子好織や比乃皮

短歌集の万句

下りた川 舟子も波の波く  
弓一画の湖をたぐるん 鳥ちとら  
流さふて月も澄海一はよらとる

歌見えやをも波もさうはくた

うはつと改名也

歌よとや曙一刻 又千金  
犬ころも走ふや焼の火路の如  
髪を也之千丈紙招乃新  
釣人を築地をさるや水濱風

といふは角力なる人

水に越をのちくち西 東



鷺考や小川水行いふれを  
とらふはくも如くも一鴨の聲

あふ高戸川のさあ

水川やあゝあゝさあははは

ふもあはれを

水もやあゝあゝあゝあゝ

ふもあはれを

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ

水もやあゝあゝあゝあゝ



雲は夕や現るる赤く描る耳  
 月、重く心ゆくや雲は鐘  
 融るる心ゆくや雲は鐘  
 葉舞のるぬき路こーや峰の音  
 名も先きゆく〜音流るる  
 けりや云々あ〜りる小鼓  
 花と峰王の〜餅あふるや雲は雲  
 草乃葉乃花は流るる雪の雲

本日の音は秋も暮や物観し

音と和ハ十の聲

突く杖の慈まをう〜せ雲は秋

ともりの角力有るるに

峰 高き四十、心のやをきこふ

晴楓拾名改しめ

たをやくも柳も〜雲を 柳原 雲

〜〜 雲はかもても白〜市の雲



心つたりの意も寝て居る言  
唐丁小葱のにらみやと能死言

節操あり画々

高乃ふ二投もはさうめて意な  
水多くて雪も舞うや吹升

如雲山の雪

海にうきうきと舞う雪は  
雪不二や裸と云ふは男ふは

待雪

雪うきうきをいふや雪は  
降一はや世と控人のつら雪

欠嵐の母如と降

於母に如る如く牛もいふ

わが人をいふ

初雪ははる雪は雪の一は雪  
融境て子をあやふと云ふ



海豚のふて先た思はばや月のを

ヲトヒセノ瀆

鯨汁一似多たきもの也符陰旅  
奈余ふかかつ之晩夜のうんろを  
四布一五布方此ら此家此蘭園の

画瀆

子午推く初る才麻の種はぬとる  
蟻ハ一セウくをゆるせ新の筈  
夜札やお葉一もつ注田登  
炭とりくわ一をちち調物子  
即ち一て衣も楮のめ屋ひる

白紙のり

腕の手を振るきあや大振引  
孫治郎のちらつくや草汁



月影く牙に狂十ふり 許さず  
如独の犬とくわは 許さず  
西へ川 驚き北は東やほら 設  
喜ゆりし時 極楽を安んずるは  
ふとすし 弓射とらうて 喜ぶは  
ふゆらうとさうら 北をきき 喜ぶは  
おせのうしや 世に川 喜ぶは  
高層をきき 許さず 喜ぶは

錦つこの命つと 帰るや 一ふさ  
独居て 鯉の軒 理や 一 此を

ある人此句難しといふ事 喜ぶは 許さず 一 此句 かなし 何事 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは

兼 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは  
川 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは  
喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは  
いふ 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは  
喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは 喜ぶは



此をきき白を心持し  
しるす書又秋如あし  
醜也  
此際  
一年を推し  
一子の皎ろ  
臨恵のふくろ

相傳は吳見喜家子  
筆 本也  
いづつきの枕を擧て

おまふとある系浮世  
きり掃一  
あきた餅搗め  
うう様女  
此佛



さうの矢に猪足で斜たうき世に  
懸乞しし許本焚てあるゝ相也  
孝姑家を去り川ありともあるし  
又就ふ家し此并書見知りつを  
鳴を激ししありするもしし此意  
ひく世の世を皆若くは徳授ふと  
天、あも懺悔しし立書しし書

相也らふ相也氣ふあり

かふふ多縁も縁を忘るし一季の意  
柳折ふ師走の人るる路、な  
るるるわ年若ら相乃 現る  
既籍の眼鏡買ふやうに徳市  
此とみししありるはとしと在層

ふや乃少し

百ちくみとまらと富あり大徳の  
酒くちを子をもとれ女のつとれ



往まらるる人を山本やうしのこれ  
壇をワうたかきく寝るぬ年の意  
良筆や月の色紙をたすく  
うし此屋や意を伝ふる物も  
むら柳餅あは春ういる事ても  
よのうらうらふ人の灯しは水く火乾  
のうし映しきくも久かき此屋も  
手厚のよるう明りや とき 鐘  
きく月やし響き寝るきく餅の音

万立改あ

餅つきに響き起る餅をくき  
ここさの井

井の端を眺る見えぬ餅あは  
年 月 日 吉

うきやうき手神ろあし  
餅 餅 餅 餅 餅  
年 一 月 一 日 一 時 一 分



美不新書

祝一先書成傳一

覽く結原きし時

任、之て書行高書か多し

門人

校合

圖大 龜成 可因 常仙 逸志 葵足



古來菴造次小之 奠沛了も  
俳諧あし守とつふしな一 菴  
晨月夕離合悲歡乃あり小  
あきくまろをやはる佳吟の  
草稿批上りしとて門人等  
之れをこひ需く割劔小附し

同臭乃亀鑑とてむしと守余小  
其跋を記せしむる固辭すれと  
ゆきし故し筆を採る  
のれや贈る

李井





明和三年丙戌春

彫工 荒木又刀

深川森下所

存儀



